

* 帝国陸軍の戦闘機が引っかけた 60m 鉄塔検証

—その7、ついに鉄塔の写っている写真発見—

アーカイブ室新聞 164号、172号～174号、177、178号、181号に60m鉄塔検証の記事を書いた。この60m鉄塔は昭和18年に調布飛行場を離陸した帝国陸軍の戦闘機がこの60m鉄塔に接触して墜落するという戦時中の機密事件があり、興味深いので調査を続けている。東京天文台100年史に掲載された三鷹時代初期の構内風景(南からの眺め)という写真(写真1)を見ると、この写真はかなり高い建物から撮影された写真であろう。南から北に延びる一直線の道路は、現在もロータリーを通る南北の道路である。一番手前に我々が通称「オバケ」と呼んだ太陽分光写真儀室が写っている。そしてその右には昭和20年2月に焼失した本館が見える。さらに「オバケ」の左には窓のある26吋赤道儀望遠鏡のドームが写っている。その両側に①、②、③、④とかすかに4本の高い鉄塔が見える。この写真はブラッシャー天体写真儀ドーム(写真2)から撮影されたものであろう。ブラッシャー望遠鏡ドームは螺旋階段で登る背の高いドームであった。写真2がブラッシャー望遠鏡ドームであるが、この写真では螺旋階段は見えない。しはし、確かな記憶として錆び付いた螺旋階段ははっきり残っている。この記憶は同期に三鷹に入った西野君の記憶にもあるようだ。



22 三鷹時代初期の構内風景(南からの眺め)

写真1 三鷹時代初期の南から撮影した構内写真

筆者が三鷹に転勤でやってきた頃にはすでにブラッシャー天体写真儀は使われていなかった。この望遠鏡の後継機として堂平観測所に91cm天体写真儀(反射望遠鏡)が完成していたからである。堂平観測所の91cm望遠鏡は天体写真儀、岡山天体物理観測所の91cm望遠鏡は光電赤道儀と呼ばれていた。これら2つの91cm望遠鏡は萩原雄祐台長の東京天文台整備構想の一環の望遠鏡である。そして188cm望遠鏡、木曾の105cmシュミット望遠鏡までが萩原構想にあった望遠鏡整備計画であったと大沢清輝元台長から伺っている。3本の鉄塔辺りを拡大したのが写真3である。



写真2 構内最南端近くのブラッシャードーム

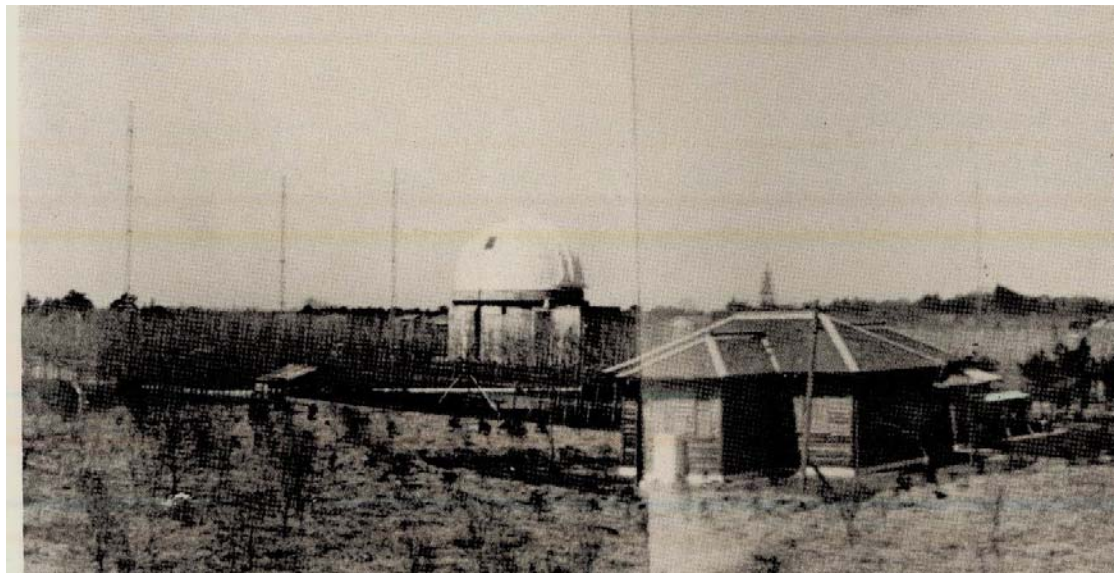


写真3 26吋ドーム左に見える3本の鉄塔

検証のために昭和8年頃の東京天文台の建物の配置図にブラッシャー天体写真儀ドームからの視準線を入れてみたのが図1である。

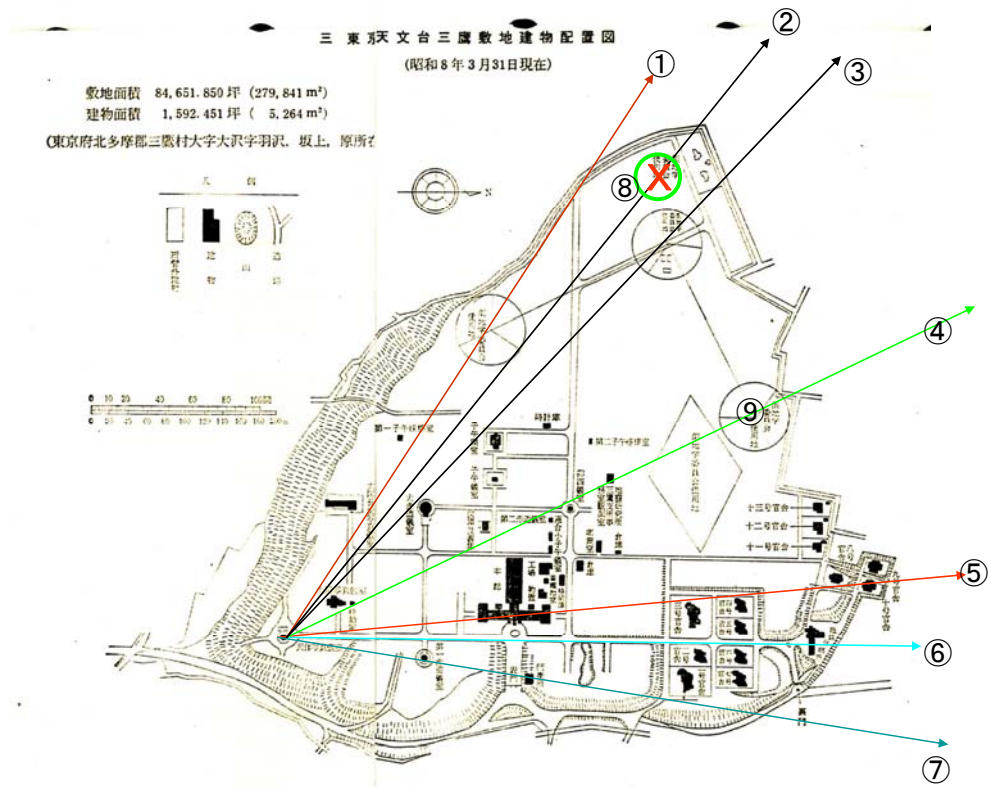


図1 昭和8年頃の建物は一途に入れた視準線

- ① はブラッシャードームから南端鉄塔へ向けた線
- ② は、ブラッシャードームから鉄塔基礎が発見されている地点⑧に向けた線
- ③ は、ブラッシャードームから北西 60m 鉄塔に向けた線
- ④ は、ブラッシャードームから北東 60m 鉄塔に向けた線
- ⑤ は、ブラッシャードームから旧本館屋上に向けた線
- ⑥ は、ブラッシャードームから南北道路へ向けた線
- ⑦ は、ブラッシャードームから第1赤道儀ドームに向けた線である
- ⑧ は、鉄塔の基礎と思われる太いボルト3本が見つかった地点で、この地点からは4方にステーを張ったコンクリート基礎が発見されている。
- ⑨ は、北東位置の 60m 鉄塔跡である。

現時点で、北東側 60m 鉄塔の基礎と、その鉄塔のステー3箇所のコンクリート基礎が確認されており、南端 60m 鉄塔から撮影されたと思われる構内の写真が 2 枚発見されている。この他、60m 鉄塔アンテナに関する東京大学 100 年史の記事、東京天文台 90 年史の記事などその存在は確かである。3 基の 60m 鉄塔アンテナは大正 13 年 3 月に完成し、その後、1 基が追加されたとあるが、その 4 本目がどこに建設されたか確かな資料がない。図 2(写真)に示す⑧の位置に鉄塔基礎が残っており、そのステーのコンクリート基礎もあり、写真の②の方向に⑧があるという事実はあるが、鉄塔の基礎の形式が④の方向の鉄

塔(図2の⑨)とは全く異なっているし、1辺100mの菱形でないという謎が残る。図3(写真)は鉄塔⑨の基礎とステアのコンクリート基礎である。



図2(写真) 図1の⑧の位置の鉄塔基礎とステアの基礎



図3(写真) 図1の⑨の鉄塔の基礎とステアのコンクリート基礎